



TITLE:

明末清初の徽州における宗族と徭
役分擔公議：祁門縣五都桃源洪氏を
中心に

AUTHOR(S):

洪, 性鳩

CITATION:

洪, 性鳩. 明末清初の徽州における宗族と徭役分擔公議：祁門縣五都桃源洪氏を中心に. 東洋史研究 2003, 61(4): 585-619

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155452>

RIGHT:

東洋史研究

第六十一卷 第四號 平成十五年三月發行

明末清初の徽州における宗族と徭役分擔公議

——祁門縣五都桃源洪氏を中心に——

洪 性 鳩

はじめに

第一章 關連文書の紹介

第二章 桃源洪氏の宗族組織と總戸

第一節 宗族組織

第二節 總戸

第三章 徭役分擔と宗族

第一節 里甲と總戸

第二節 宗族と國家

結論

は じ め に

明清時代は宗族制度の歴史からみると、宗族組織がもつとも發展した一時期であつたといふことができる。江南を中心とした中國の南部地域では、同族結合を象徵する族譜が多く編纂された。族譜には家法・宗規などといわれる宗族の規約が收録されている場合が多く、そのうち相當數の家法・宗規では、「供賦役（税）」・「重國課」・「謹國稅」などというタイトルで、國課を誠實に納付すべきだと規定している。⁽¹⁾

一方、明清時代の重要な賦役徵收システムとしては里甲制があり、國家は鄉村社會に設置した里甲組織を通して財政收入を確保することができた。そして明中期以後、里甲制に對する様々な改革が展開し、清代になると地丁銀制が實施されいわゆる「兩稅法」に基づいた賦役徵收體制は制度的に解體されたが、里甲制は廣東・福建を始めとして安徽の徽州などの地域で、なお維持されていた。⁽²⁾

本稿は、宗族組織が家法や宗規で「國課を誠實に納付すべきである」と強調したのはどのような背景があつたのか、という基本的な問題意識から始まつた。すなわち、こういう規定は基本的に當時、成長している宗族組織の位相變化と國家の徵稅システムの中での宗族組織の役割を反映していると思われる。したがって本稿は、國家が郷村民に賦課した様々な徭役をめぐり、徽州府の祁門縣の一宗族によつてなされた公議に着目する。この具體的事例を究明することを通して、里甲制下で宗族組織がどのような役割をはたしていたのかが明らかになるであろう。

これまで里甲制と宗族との關連に關する研究はほとんど廣東と福建に集中していた。片山剛は清末廣東の珠江デルタの里甲制を圖甲制と名附けて、制度の全貌をはつきりさせながら、宗族組織と圖甲制との結合を確認した。劉志偉も片山剛と同じく珠江デルタの戸について分析した。兩者の重要な見解の差は、片山剛の場合、稅糧が子戸↓總戸↓甲↓圖↓官のルートで徵收・納入されているが、劉志偉の場合、自封投糧が實施され、包攬とか宗族が一括して納入する方法こそ自封

投櫃の基盤の下で出現できることだと主張した。福建に關して陳支平は福建の家族・郷族組織は族人・郷人の徭役と賦税の負擔を保護する作用を果たし、郷族内部の關係の平衡を維持するために國家から賦課された賦役に對して内部で再分配を實施したことを言及した。鄭振滿は福建の場合、少なくとも明中期以後、家族制度が里甲制度と結合し、基層政權組織へと變化したことを強調した。以上の研究は賦役税収と宗族組織との關係に言及しているが、國家から賦課された賦役が宗族内部でどのような方式で處理されたか、それが賦役徵收システムのなかでどのような意味を持っているかに關しては、いまだ具體的な研究が現われていない。また近年、いわゆる徽州文書の發見によつて注目されるに至つた徽州地域は、同族結合が強かつた所であるが、賦役徵收と宗族との關係に關してはまだ廣東や福建ほどには研究が多くない。

本稿は里甲制と宗族組織とが結合する傾向をみせる地域としてさらに徽州に着目し、このような地域で里甲制が維持ないし存続できた背景の一つとして宗族を理解するという目的を持っている。またこれを通して、宗族と國家との關係についても史料で確認できる限りで議論を展開したい。

第一章 關連文書の紹介

本稿で使用している史料は、明末清初、徽州府の祁門縣、五都、樺墅村に居住していた桃源洪氏一族の合同文書群である。桃源洪氏一族については、劉和惠によつて安徽省博物館所藏の洪氏譽契簿をもとに紹介されたことがある⁽³⁾。また、『中國歷代契約會編考釋（下）』（張傳璽主編、北京大學出版社、一九九五）には、北京圖書館（現、中國國家圖書館）所藏の『洪氏歷代契約抄』（二名、『壽公祀業抄白簿』、明抄本）が收録されており、そして『徽州千年契約文書』（花山文藝出版社、一九九二）にも桃源洪氏一族の文書がかなり收録されている。こうした文書のほとんどは賣買・典當・佃租などの土地關係文書であり、また佃僕應役文書も多い。そのほか、贈送批與文書や族產管理の文書も含まれおり、このような散件文書は、族譜のみでは分かりにくい宗族の發展過程について具體的な情報を提供してくれる。

しかし本稿では、これに加えて南京大學歴史系資料室所藏の「糧長・都長・丈糧公正・里役排年の承當に關する合同文書」〔6〕に含まれる六點の桃源洪氏一族の文書を活用したい。敘述の便宜上、まずその全文を列舉する。

(A) 萬曆三十四（一六〇六）年 洪德本戶立倉當糧長合同（〇〇〇〇五六）〔7〕

伍都三甲洪德本戶、戶丁洪世義・洪成德・洪天與・洪貞文等、今蒙李爺僉點洪德本戶東區糧長、本戶原米共伍拾貳石柒斗、除優免貳拾玖石外、仍實在米貳拾參石柒斗僉役。今因本戶各人分下、糧數多寡不同、以致人心不一、今衆會議、每石米貼銀參兩文整、與□（承）役之人、前去經收糧編、管解南・北二京併安慶・本府永豐倉、一應錢糧扛解等項費用、其銀照糧逐一徵出貯匣、應時支承役之人應用、不致有悞。各項錢糧起解・銷繳・批廻及銷〔注〕勘合□□等項、盡是承役人之當、不致累及有糧不承役之人。今恐人心不齊、立此文約、照糧徵收議貼銀兩貯匣、不得執拗推挨、致有悞國事。如違、賁文告理、照□（糧）照議、追付充役之人。今恐無憑、立此合同文約爲照。

合同貳紙各收爲照（半字）

萬曆三十四年正月初九日 立文約人 洪世儀（押） 洪成德 洪天與（押） 洪貞文（押） 洪貞吉（押） 洪貞國 洪天資 洪貞瑞（押） 洪泰階 洪嘉永 洪士玉 洪天祥 洪明生（押） 洪玄周 洪夢□（押） 洪貞白（押） 洪有功（押） 洪天開（押） 洪應孫 洪產 洪士樞（押） 洪應祺 洪佑生（押） 洪大行（押） 洪大順 洪天寵 洪好德（押） 洪貞民（押） 洪大奮 洪□孫 洪奎德 洪思訓（押） 洪成元（押） 洪應元（押） 洪士英（押） 洪三孫（押） 洪義富（押） 洪應科 洪天誥 洪大志（押） 洪鳴孫 洪尙墉 洪士驥 洪應會（押） 洪應秋（押） 洪貞教 洪應恩（押） 洪應桂 洪天南（押） 洪冬芳（押） 洪旺□ 洪文德 洪貞健 再批…衆議、每糧貳拾參石、每石議貼、各項罪贖・飯食・支費等項、每石貼銀陸錢正。

五都三甲の洪徳本戸は知縣の李希泌⁽⁸⁾の指名を受けて、萬曆三十四（一六〇六）年の東區の糧長に當つた。⁽⁹⁾本戸の税糧は總五十二石七斗であり、その中で優免の恩恵を受けている二十九石を除いた二十三石七斗のみに對して徭役を負擔するが、本戸に屬している各戸丁の税糧額が一定ではないので、議論して（税糧額を基準として）毎石當り津貼銀三兩ずつを醸出して承役人に與え、糧長の役を遂行することに必要な一切の費用をこの津貼銀から充當することにした。その他、銷繳・批廻および銷⁽¹⁰⁾勘合などの項目に必要な費用は承役人本人が責めを負うことにした。そして追加事項として、罪贖・飯食・支費などの名目で税糧二十三石に對して毎石當り津貼銀六錢ずつを加えて醸出することにして、文書の最後に附記した。

（B）康熙二（一六六三）年 壽公六大房洪貞兆等立津貼里長合同（〇〇〇〇五七）

立合同壽公六大房貞兆・大有・貞齊・貞淪・應基・應廷等、原承祖五都三甲里長、今于康熙三年輪該充役、與相公均當。所有里役在官費用、悉照衆祠文書照糧均出、仍有九年排年、悉照舊例、壽公匣每年貼銀肆兩捌錢、以爲排年出身辛力、其銀逐年排年照糧徵收。有糧之家、務要照比應期兌銀付排年上官、不得恃頑執拗。如有恃頑不兌者、聽排役出身之人、責文理論。出身之人、亦不得生端外取。其排役照前例、六大房拈鬮輪當、兩房充當一年。所有□櫃・補徵・加派、仍係某年經手排年、即徵某年分加派完納、不得推辭下手之人。今恐無憑、立此合同爲照。

合同□紙□□□□（半字）

出身當役人名

長房	懋仁	值四伍陸月	貳房	應廷	值正貳參月	參房	貞淪	值肆伍陸月
四房	應祐	值正貳參月	五房	應基	值陸柒捌月	六房	貞齊	值陸柒捌月

康熙二年十一月二十日 立合同 洪貞兆（押） 洪大有（押） 洪貞齊（押） 洪貞淪（押） 洪應基（押） 洪

應祿 洪鳳池 洪貞祚（押） 洪貞頤（押） 洪應啓 洪應福 洪應禎 洪應祝 洪應廷 洪錫極 洪璉（押） 洪璘（押） 洪聖庚 洪祥庚 洪璿 洪珏 洪如栢（押） 洪璋 洪廷元 洪懋相 洪懋仁 洪八毛 洪九毛 洪約中 洪啓中

再批：〔康熙〕三年分錢糧、六房出身人役、眼同徵收上納、毋許私徵。倘有故意恃頑、不照比兌銀、許排役之人役・六房公衆、一齊理論。

壽公六大房は五都三甲の里長戸として、康熙三（一六六四）年分の現年里長の役を相公房と均分に負擔することにした。⁽¹⁾里役を遂行するために必要な諸般費用は、すべて衆祠で作った文書に依據して、稅糧額の（多寡）によって公平に醸出し、餘りの九名分の排年里長の役に對しては舊例に従い、毎年壽公匡に津貼銀四兩八錢を醸出し、排年里長の辛力銀として負擔することにした。津貼銀は毎年排年里長が徵收することとする。具體的な里役分擔の方法に關しては、六大房が抽籤して（承役人を選んで）順番に里役を擔當し、兩房（壽公房・相公房）が一年の役に對して責めを負うことにした。またすべての□櫃・補徵・加派は該年度を擔當する排年里長が責任を持って完納すると規定した。文書の最後には壽公六大房から承役人として選ばれた人々の名前と承役時期を明記した。追加事項として康熙三年分の錢糧を六房の承役人が共に徵收して納入し、私徵を禁じ、これに違反した時の處罰方法を附記している。

（C）康熙二（一六六三）年 族衆洪日振等立津貼公正等合同（〇〇〇〇五六）

立合文族衆洪日振・鳳池等、今奉縣主余仁臺、奉旨、併奉部院行文、覆行清丈。今本都照糧、因該本甲洪元慶充當公正、照舊光暉充當公副、所有弓筭書畫、具係舊名。今十排年已立合文、分保分丈。又奉明示在外、今吾族兩大房、應該朋充公正之役、今舉練事老成陸人、充當公正、當官值月比較丈量田畝・造册及經理錢糧事務等項。倘有事體、各

津貼銀の徴収については、本甲に屬する祠堂と兩房（相公房・壽公房）の錢糧および各房花戸の錢糧の外、甲首の錢糧も（津貼銀徴収の）対象にして、税糧額によって公平に醸出して出身人役に支給して不時の費用に使うようにした。そして公正人などには徭役を遂行する日から始めて毎年工食銀二十四兩を支給することにした。また優免については通縣の大例に従う。丈量の完了の後、（その結果を報告する過程で必要な）解冊・駁冊・覆丈・公錯公費などは税糧額によって醸出するが、造冊歸戸における錯誤は承役人が責任を取ることにした。公費銀は暫定的に（税糧額を基準に）⁽¹³⁾ 每石當り五錢を醸出して應役人に支給することにした。そして順治四（一六四七）年に實施された丈量で間違いがあれば、その時の該公正が責任を負うこととし、このたび新たに公正の役に當つた人には責任を追及しない。最後に公正の役に充當された六名⁽¹⁴⁾の名前を羅列しておいた。

(D) 康熙二一（一六八三）年 六大房洪貞兆等立津貼公正等合同（〇〇〇〇五六）

立文約六大房洪貞兆・大有・鳳池・貞齊・貞淪・應廷等、今奉縣主余仁臺、奉旨、併奉部院行文、覆行清丈。今本都照糧、因該本甲洪元慶充當公正、照舊光暉充當公副、所有弓筭書畫、具係舊名。今十排年已立合同、分保分丈。又奉明示在外、^(a)今六大房應該朋充公正一半、今舉練事老成充當公正、當官值月比較丈量田畝・造冊及經理錢糧事務等項。倘有事體、各宜小心謹慎、守法奉公、依期管理、毋致差錯違悞公事。其本甲下祠堂錢糧及兩房錢糧及各花戶外甲首錢糧、照糧均出、津貼出身人役、以便不時費用。其局內之人、不得花費濫用等情。有糧之家、亦不得橫生異議、悞吝執拗、以悞公事。其公正人等、自當役之日爲始、每年共給工食銀二拾四兩、以酬勞苦之資。^(b)今六大房該當公正一半、壽公分下公舉人、除衆議祠堂貼賤銀拾貳兩外、仍恐人工食不敷、衆議六房祀匣併秩下各花戸・神會、一切照糧津貼銀六兩、以補出身勞苦之資、不得橫生異議、悞吝執拗、以悞公事。其壽公分下公正人、自當役之始、每年共給工食銀拾捌兩、以酬勞人之資。所有優免、照通縣大例。倘丈完後、解冊・駁冊・覆丈・公錯公費、俱係照糧均出。其弓則

造冊歸戸差訛、盡是充役人承當、不得累及衆人。其照糧均攤公費銀、每石目下暫徵伍錢、付應役人費用。其順治四年、經手公正造冊等項、或有差訛、俱係舊役人承當、不得累及新役之人。今恐無憑、立此合文一樣四張、貯匣一張、出身人各守一張存照。

◎壽公分下公正一半、公舉三人。洪于祥 洪次恭 洪公辰

康熙二年拾一月二十六日 立文約六大房 洪貞兆 洪大有(押) 洪貞淪(押) 洪應基(押) 洪應廷(押)

洪貞齊(押) 洪鳳池 洪貞祚(押) 洪貞頤(押) 洪光祚 洪應望 洪應啓 洪應祿 洪應祥 洪應禎(押)

洪應□ 洪鎔 洪應福 洪應成 洪應祐 洪錫璋 洪錫極 洪錫仕 洪聖庚 洪祥庚(押) 洪璵(押) 洪璘

(押) 洪璿 洪錫解 洪如栢 洪廷元 洪錫駿 洪錫齡 洪錫彥 洪錫勇 洪約中 洪啓中 洪崇中 洪懋相

④再批：壽公祀匣外、加津貼文銀貳兩整、不在照糧之內。照。

⑤本年十二月十六、付過辛力銀捌兩正。其寫冊雜務、照相公房例。

(D)の合同は(C)の合同に①②③④⑤部分だけが追加されているので、この部分のみ要約すると、次のようである。

①(兩大房が公正の役を朋充することにしたので)六大房がその半分を擔當する。②六大房が擔當する半分の公正の役のために、壽公房から承役人を選出し、祠堂から支給される貼賧銀十二兩(二十四兩の半分)の外、工食銀の不足の恐れがあるので、六房の祀匣と六房秩下の各花戸・神會から税糧額によつて津貼銀六兩を醸出して加えて承役人に支給することにした。そして壽公房の公正人には徭役を擔當する日から始めて、毎年工食銀で總十八兩(十二兩十六兩)を支給すると規定した。③壽公房で公正の役を擔當する三名の名前を記録し、追加事項として④壽公房の祀匣から支給する外、文銀二兩を加えて津貼銀で支給するが、これは税糧額によつて醸出して支給する十八兩とは別に支給するものであると明記し、⑤十二月十六日に辛力銀で八兩をすでに支給し、寫冊雜務などは相公房の例に従つて行なうことを確認している。

(E) 康熙十二(二六七三)年 洪氏族衆鄉約大有等立津貼都長合同(〇〇〇五六)

立合文洪氏族衆鄉約大有・時高等、今奉縣主何老爺鈞票、遵奉憲檄諭、同各都里長舉報都長一名。今當年二甲里長、不便擅報。于本年七月初七日、合同通都四約會議、先立合文四紙議定。凡有公務公費、四約均派均出。其都長出身之人、四約同在神前拈鬮、擇賢約拈得都長。今本族齊集會議公舉二人、一長一副、遞年議貼都長辛力柒兩、議貼都副肆兩、其銀在本族照糧均派、係相・壽二公頭首同徵、遞年夏冬二季付足、不致短少。其公費三匣均出、有糧之家、不得恃頑執拗。如恃頑不出者、聽出身人責文鳴官理論。出身者務要謹慎、不得妄生事端。如有生事等情、盡是出身人承當、不得累及族衆。立此合文四紙、相・壽公二房各執一紙、出身人各執一紙存照。

族衆公舉都長 洪孔政(押)

都副 洪如栢(押)

壽公匣收(半字)

康熙拾貳年七月初九日 立合文 洪大有(押) 貞齊(押) 貞淪(押) 貞祚(押) 貞任(押) 大欽(押)

貞頤(押) 貞灝(押) 應啓(押) 時高(押) 時俊(押) 良丞(押) 頤(押) 應基(押) 之驊(押)

龍搏(押) 光東(押) 應祿(押) 應禎(押) 應儀(押) 應祥(押) 應福(押) 應廷(押) 應祐

(押) 應誠(押) 應祝(押) 應祖(押) 應高(押) 璋(押) 珏(押) 聰(押) 錫奎(押) 邦璋

(押) 璘 聖庚(押) 璿(押) 覺先(押) 起先(押) 哲先(押) 春(押) 敏先(押) 邦珍(押)

廷元(押) 邦兆(押) 長基(押) 夢麒(押) 錫勇(押) 最先(押) 邦培(押) 邦儀(押) 孔牧

(押) 丹鳳(押) 豐(押) 邦璫(押) 應攀(押) 德新(押) 崇中(押) 美中(押) 約中 懋相

(押)

宦內名目、衆議、洪仁友再四約公費、本約鄉約同徵。倘有都內不測之事、費用族衆管理、不得累及出身之人。照。

無分長・副貳人、朋充辛力外、加銀壹兩、共拾貳兩、各陸兩。照。其銀合足捌伍色。(強調は筆者)

洪氏族衆である郷約の洪大有・洪時高等は、各都の里長たちに都長一名を推薦報告せよという知縣の何縉などの指示を受けた。しかし現年里長である二甲の里長が勝手に報告できる事案ではないので、本年(康熙十二年)七月七日に通都の四約が議論して合文を作り、すべての公務と公費を四約が公平に負擔することにした。都長の役に充當する人員は抽籤で決定することにしたが、(抽籤の結果)樺墅約から都長を選出することにした。さらに本族が集まって議論して都長・都副各一人を選出し、辛力銀で都長には七兩を、都副には四兩を各々支給することにした。辛力銀は本族で税糧額によって徴収するが、相・壽二公房の頭首が共に徴収し、毎年の夏と冬、二回に分けて支給することにした。そして公費は三匣⁽¹⁷⁾から公平に醸出することにした。また追加事項としては四約の公費を(相・壽二公房の頭首の外にも)本約の郷約が共に徴収すること、もし都内に意外の事が起こったら、費用は族衆が管理することにし、(都長・都副に支給することにした十一兩)に一兩を加えて都長・都副の區分なく、六兩ずつを支給することと修訂した事項がある。

(F) 康熙十四(一六七五)年 族衆洪大有等立津貼團練合同(〇〇〇〇五六)

立合文族衆洪大有・洪良丞等、遵奉憲檄、併奉縣主明示、團練以同地方各都所報、總・副俱要紳衿。本都四約公議、鄉總錦溪約仰鳳、練副珠溪約謝瑚、本約擬合練副壹名。今集衆公議、舉報的名武庠洪春、在官任事。衆議遞年本族津貼辛力紋銀壹拾貳兩整、其津貼銀在本族、併各甲寄戶、及資本作糧均派、遞年作四季交付。所有錢糧、俱係紳衿殷寔(實)徴収出支、不得累及在官出身之人。所有□(各)公費、不在本族拾貳兩之內。其出身人、自任事以後、務要謹慎、趨事赴公、不得好生端。如借端生事等情、盡係出身人承當、不得累及族衆。凡有糧之家、悉照合文、如期付出、以應辛力併公費、不得執拗。如有違文不遵約束者、合衆鳴官理諭。今恐無憑、立此合文三紙、二大房各收一紙、出身

人收一紙爲照。其辛力、自任事之日起。

公舉練副 洪春（押）

合同一様參紙各收一紙。照。（半字）

康熙十四年十一月 日 立合文 洪大有（押） 貞齊（押） 貞淪（押） 貞祚（押） 貞任（押）

一、徵收錢糧紳衿・頤（押） 大欽 貞灝（押） 良丞（押） 應基（押） 之驛（押） 龍搏（押） 應禎（押）

應儀（押） 應祥（押） 璉（押） 應福（押） 應祝（押） 應廷（押） 應祐（押） 應祖（押） 應誠（押）

業 應嵩（押） 應攀 璿（押） 璋（押） 珏（押） 錫圭（押） 邦韋（押） 聖庚（押） 邦璜（押） 覺先

（押） 起先（押） 敏先（押）

一、同徵・聲（押） 光東（押） 應祿（押） 錫驍（押） 如栢 廷元（押） 邦珍（押） 邦珖（押） 長

（押） 夢騏（押） 開先 錫勇（押） 應昂（押） 邦任（押） 哲先（押） 最先（押） 邦楫 天孫（押）

煌 丹鳳（押） 有標（押） 孔牧（押） 德新 崇中 孔政（押） 美中（押） 約中（押） 立中（押） 捻相

蘭生（押） 豐（押）

一、除田畝外、以本作糧。

聲／ 邦任 壹石 孔玫 壹石貳斗 世進 五斗 富基 三斗

共四石

業、 榆先 三斗 美中叔侄 三斗 （強調は筆者）

族衆である洪大有・洪良丞等は、各都で團練を組織し、紳衿の中から郷總と練副を選出報告せよという知縣の指示を受けた。本都の四約の公議に従って、郷總には錦溪約の仰鳳を、練副には珠溪約の謝瑚を充當し、本約（櫟墅約）からも一

人を練副に充當することにした。さらに族衆を集めて議論した結果、武庫（武生員）の洪春を練副に充當することにした。洪春には津貼辛力銀十二兩を支給し、本族と各甲の寄戸⁽¹⁸⁾および資本⁽¹⁹⁾を糧で換算して税糧額によって公平に醸出し、毎季一回支給することにした。すべての錢糧は殷實な紳衿が徴収して支出し、練副に充當される人員に困難を與えてはいけなかった。またすべての公費は津貼銀十二兩とは別に支給することを明示した。そして練副に充當された洪春と、錢糧を徴収する紳衿の名單などが明記されている。

第二章 桃源洪氏の宗族組織と總戸

第一節 宗族組織

明清時代、祁門縣の五都は縣衙の東北方の祁山のふもとに位置し、一つの圖（里）だけが設置され、胥嶺・樺墅・仰村・于村の四つの自然村落で構成されていた。⁽²⁰⁾このなかで、樺墅村は洪氏の宗族の者がほとんどを占める同族村落であった。

桃源洪氏と呼ばれる宗族が樺墅村に最初に移住したのは、元末明初の時、洪均祥という人物に始まる。『桃源洪氏宗譜』⁽²²⁾卷三、「祁門桃源世系圖」の洪均祥に関する記述をみると、「舊居の洪家墩が戦亂で壊滅し、村の面積も隘小であったので、ついに王村へ家を徙した。その地の舊名が桃木源であったために、桃源派と名附けた。村口にはまた古い樺が多い、故にまた樺墅里と名附けた」⁽²³⁾というのみで、洪均祥が王村（＝樺墅里）へ移住した状況については、簡単な説明しか知ることができない。

しかし洪均祥が王村へ移住した後、どのように宗族の基盤を形成したのかを窺うことができる文書史料が残っている。

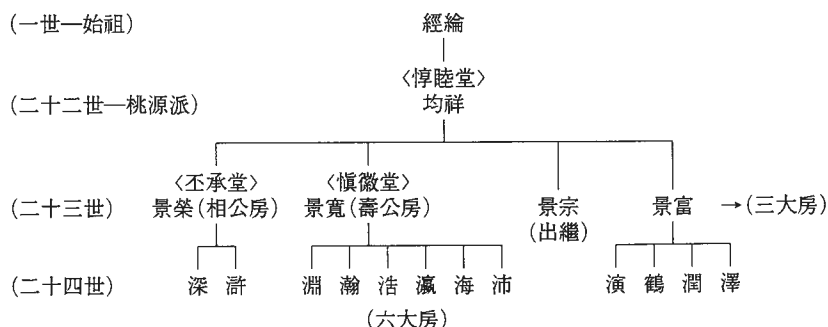
【附録一】の八八六・八八七の文書は、洪均祥がその妻の叔父（叔岳父）王寄保と岳母（丈母）の王阿許から財産の贈與を

受けた贈送批與文書である。この二つの文書によれば、洪均祥は王村へ移住した後、王姓（＝王伯成、『桃源洪氏宗譜』によると王應成）の次女の寄奴（或は寄奴娘）と結婚して王家に入婿し、これを契機として妻方の家から相當の財産を贈與されることになった。また五五二の文書は、王姓の者から土地を購入したことを示しており、洪均祥が岳父（丈人）の王氏との關係を通して土地を獲得し、桃源洪氏の宗族組織の重要な經濟的基盤としていった。⁽²⁴⁾これ以後、桃源洪氏は、嘉靖三十六（一五五七）年までは、例外なく異姓の戸、あるいは外地の洪姓の戸との取り引きを通して土地を擴大していた。そして嘉靖三十年代以後になると、桃源洪氏の宗族内での取り引きに轉換してゆく。嘉靖三十年代を前後して、桃源洪氏の族産の經營は安定期に入ってゆく。

洪均祥には全部で四人の息子がおり、長子が景榮、次子が景寛、三子が景宗、四子が景富である。⁽²⁵⁾そのなかで、三子の景宗は洪均祥の妻家である王姓の養子となった。⁽²⁶⁾長子の景榮は一名、柳相と言い、字を仕仁、次子の景寛は名が壽、字を仕友と言う。この二人の人物が桃源洪氏の文書にみえる「相公」と「壽公」である。ところが、相公・壽公と共に現れるのが「六大房」という名稱である。「六大房」という名稱の用例をみると、「六大房」と單獨で現れる場合と、「壽二公六房子孫」などのように壽公と聯稱される場合とがあるので、六大房は壽公と何らかの關係があると見られる。族譜の「祁門桃源世系圖」によれば、壽公（＝洪景寛）には六名の息子がおり、【附錄1】の文書で六大房と共に名前が記される「續」と「起」は各々洪景寛の長子と次子である淵と瀚の孫子と息子である。つまり、六大房は洪景寛を頂點とする壽公房であり、各房は洪景寛の六名の息子を頂點とする宗族組織であることが分かる。⁽²⁸⁾

そして同治『祁門縣志』卷九、輿地志九、祠宇志一には五都樺墅村にある桃源洪氏の祠堂に關する記録がある。當時まで惇睦祠・丕承堂・慎徽堂という三つの祠堂が残っていたそうである。『桃源洪氏宗譜』卷五、祠堂の「桃源祠堂記」によれば、惇睦祠（惇睦堂）は唐代、徽州へ移住した始祖の洪經綸と、遷祁門始祖の洪大楠、そして遷樺墅始祖の洪均祥を祭る祠堂で、桃源洪氏の主祠であることが分かる。丕承堂は永英などがその祖父である相一公のために建立し、慎徽堂は

【圖】 桃源洪氏の宗族組織



汝淵などが父の壽二公のために建立したという。

このような桃源洪氏一族の宗族組織を整理すると上のようである。

第二節 總 戸

總戸の性格に關する先行研究によれば、廣東の總戸は里長戸であり、宗族を單位として構成された戸である。⁽²⁹⁾徽州の場合は里甲編制上の帶管戸であるが、納稅團體として機能し、宗族を單位として構成されたという點では同じである。⁽³⁰⁾それでは、史料を通して桃源洪氏の總戸について検討してみよう。

(A) の合同は萬曆三十四(一六〇六)年に糧長の役に當った洪德本戸が糧長役を遂行するため、各構成員(戸丁)が負擔を公平に分けるために作った文書である。この合同で注目したいのは、糧長の役を負擔する主體の洪德本戸である。

『桃源洪氏宗譜』卷三、「祁門桃源世系圖」によれば、二十八世に天宿という譜名で載っている「一名寄武、官名德本、號一齋」という人物がいる。しかしこの合同に登場する他の人物を同じく「祁門桃源世系圖」で探してみると、相公房と壽公房の子孫が等しく參加していることが分かる。のみならず、この中で世義・奎德・文德・産などは二十七世で、族譜でみえる洪德本(≡洪天宿)よりも輩行が高い。従って洪德本戸は洪天宿という人の家族のみで構成された戸であるとは言えない。

そしてこの合同に參加している五十三名の人々の中で族譜で確認できる三十名の

人物の家系をみると、洪均祥の四子の景富の子孫である人々は全然みえない。前に説明した通り、洪均祥には四名の息子がおり、その中で三子の景宗が王姓へ出繼したのでこれを除外すると、桃源洪氏の宗族は景富を含めた洪均祥の三人の息子の後孫で構成されるべきである。ところが洪徳本戸により作られた合同に景富の子孫は参加していなかった。とすれば、洪徳本戸は洪均祥を始遷祖とする桃源洪氏の宗族すべてで構成されたというより、相公房と壽公房の子孫のみで、或はその一部の人々で構成された總戸である可能性が高い。とすれば、(A)の合同で言われる「戸丁」というのは、實は個別家族(Ⅱ子戸)の代表者(Ⅱ戸長)であらう。

ところが【附録2】の一〇の文書以下をみると、天啓二(一六三二)年と天啓三(一六三三)年には「徳本戸」という名がみえるのに對して、それ以後から崇禎の時までは「元慶戸」という戸名がみえる。文書上の主要當事者で賣主として記されている人々は「徳本戸」、あるいは「元慶戸」に屬した戸丁であらうが、その中で一〇と二二の文書で記されている「洪學富」という人の場合は「徳本戸」「元慶戸」の兩戸に共に屬していた。「徳本戸」と「元慶戸」という戸名が時間的に連續していること、そして「洪學富」という人が兩戸の戸丁であることなどは注目すべきである。この事實から兩戸の關係を考えると、「徳本戸」と「元慶戸」は同一戸として、天啓四(一六二四)年に戸名を變更したか、あるいは「徳本戸」が分戸した後、「徳本戸」という戸名は使わずに、分戸した戸名のなかの一つである「元慶戸」が、文書上に残っているのだと解釋できる。いずれにしても「徳本戸」や「元慶戸」が個別家族を單位とする戸とするより、總戸であると考える方が正しいと思われる。

また(B)と(C)、(D)の合同をみると、合同を作る主體は壽公六大房と吾族兩大房、六大房である。これらは桃源洪氏の宗族組織であることが明らかである。ところが(B)の合同の壽公六大房は康熙二(一六六四)年の里長役を擔當する里長戸である。⁽³²⁾壽公六大房が里甲制上の戸として機能していることもまた明らかである。⁽³³⁾また合同の内容で、康熙三年分の里長役を相公房と均當にするとした點から、壽公六大房と相公房が別の獨立の戸であり、朋充の方式で里長役を分

擔していることが分かる。だから、壽公六大房と相公房は一つの宗族の内の別の總戸である。(C)と(D)の合同の吾族兩大房と六大房も、相公房と壽公房の總戸を宗族組織の名稱で別に表現したに過ぎない。そして公正の役を擔當する主體であるので、すべて里長戸である可能性が高い。⁽³⁴⁾

以上のことを整理すると、桃源洪氏一族には明の萬曆三十四(一六〇六)年の前後の時期から天啓三(一六三三)年まで、相公房と壽公房を併せた「洪徳本戸」という總戸があり、天啓四(一六二四)年から清の康熙初期までは「洪元慶戸」という總戸があった。また註(33)で示したように、明末(崇禎十四年)にはすでに「洪公壽戸」という壽公房のみで構成された總戸も存在したことも分かる。そうすると、明末清初、桃源洪氏一族は相公房の總戸と壽公房の總戸(＝洪公壽戸)を持つており、正確な内容は分かりにくいが、洪元慶戸という總戸も持つていた。即ち、明末以後の桃源洪氏には宗族組織の分派を單位として作られた少なくとも二つの總戸と他の構成を持つた總戸が並存していた。また、これまでの總戸に関する研究では、總戸を區別する重要な基準として「戸名不變」という點を擧げているが、桃源洪氏一族の例による限り、總戸の戸名は時期によって變化していたことが分かる。

第三章 徭役分擔と宗族

第一節 里甲と總戸

普通、一つの里甲戸は分家・分財によって分戸する。また流亡などによる戸絶もあった。このような色々な現實の變化を十年一審の黃冊編造によって國家が把握することが、里甲制の原則とされた。したがって、分戸をすることなく、宗族やその分派を單位として里甲戸を形成するという點で、總戸は里甲制の原則に反するものであった。にもかかわらず、總戸が國家により容認されていたのは、賦役を徵收する國家の立場からみれば、解體しつつある里甲體制下で、總戸を通す

ことで賦役の徴収が保障される役割を期待できたためであろう。そこで、本節では徭役に關する總戸の内部の公議を通して、總戸がどのように徭役負擔に應じていたのか検討してみよう。

近年、岩井茂樹は里甲制について、「團體的公課負擔のシステム」という面に注目し、「團體としての求心性」と「内部での負擔の公平性」が里甲制を機能させる基本的な條件であると説明した。⁽³⁵⁾これを言い換えれば、里甲制の解體という状況は、里甲組織が「團體としての求心性」と「内部での負擔の公平性」という基本條件を充足させられない状況から生じたことだと言いうる。明中期以後、解體に向かう里甲組織の求心性と公平性を保障するため、様々な方法が摸索されるが、その一般的なものとして「朋充」と「津貼」という方式があった。「朋充」とは、一つの徭役に對して複数の戸が共同で負擔する方式であり、「津貼」とは、實役を負擔する戸のために實役を負擔しない戸が金銭で自分が擔當すべき分に代える方式である。

ところが徽州文書の中では「朋充」や「津貼」の方式が特に宗族組織の公議を通して行なわれる事例が少なからず見える。本稿で使した(A)(B)(C)(D)の合同も、里甲制下の徭役をめぐる宗族内の「朋充」と「津貼」に關する資料であった。この文書によれば、里甲戸は分戸した個別家族を單位としたものではなく、複数の家族が宗族という血縁的紐帶に基づいて構成した總戸の形態を取っている。そして總戸に負課された各種の徭役は總戸に屬している個別家族、即ち子戸の間で「朋充」や「津貼」の方式で負擔されることになっていた。⁽³⁶⁾

まず總戸の内で行なわれる徭役分擔の方法をみよう。(A)の合同をみれば、總戸の洪徳本戸は子戸の間の負擔能力の差を考慮して、税糧額を基準で毎石當り津貼銀三兩ずつを取り立てるように決めた。(B)の合同の里長戸である壽公六大房の場合も、各子戸の税糧額を基準として毎年四兩八錢ずつの津貼銀を取り立てることにした。ところが實役の點からみれば、田・丁など財産の状況とか税糧額にかかわらず宗族の分派に従って各房で一名ずつを抽籤により選んでいる。彼らは三箇月間、他の房から選ばれた承役人一人と共に里長役を行なっている。里長役を行なう期間は、壽公六大房が一月

から八月まで里長役を行なっているから、残りの九月から十二月までは「均當」する相公房の分であろう。ここで注目すべきは、兩房が「均當」することを決めたにもかかわらず、壽公房は八箇月分、相公房は四箇月分の徭役を行なっていることである。また六月には他の月とは違って四人が徭役を行なっている。正確な理由は提示できないが、里長役の負擔が時期によって違うためか、或は兩房の負擔能力の差のためではないかと思われる。とにかく、これは徭役の負擔が單純に機械的に、あるいは時間的に等分されたのではなく、實際の負擔の輕重によって、または負擔能力の差によって、合理的かつ公平に分擔されたのを示す。壽公六大房という宗族の分派を單位で構成された總戸は、自分に賦課された里長役を公正で公平に分擔することによって、血縁として本來持っていた「團體としての求心性」をさらに強めることができたのではなく、「内部での負擔の公平性」も保障することができた。

一方、(C)と(D)の合同は康熙二二(六六三)年十一月二十三日と十一月二十六日、わずか三日の差を置いて、清丈の實施に際して公正の役を賦課された桃源洪氏一族、即ち吾族兩大房と六大房が主體になって作った文書である。(C)の合同での工食銀と公費銀の徴收方法は、本甲に屬した祠堂と兩房(相公房・壽公房)の錢糧および各房の花戸の錢糧の外、甲首の錢糧も徴收の對象として、税糧額によって公平に取り立てて、その額は工食銀が二十四兩である。また丈量が完了した後、その結果を官府に報告する過程で發生する解冊・駁冊・覆丈・公錯の公費などに充當する公費銀は、每石當り五錢を取り立てることとした。ここでも税糧額を基準としたのは公平性を保障するためである。ところが(D)の合同の⑥をみると、壽公房から選ばれた承役人には、(C)の合同で決めた十二兩(二十四兩の半分)の外に、六兩を加えて支給している。その理由は工食銀十二兩では足りない恐れがあるからで、この追加支給分の六兩を出すのは「六房の祀匣と(六房)秩下の各花戸と神會」である。そして再び壽公祀匣から支給すること以外に二兩を加えて支給するとし、これは税糧額によって分擔するものには含ませないとした。結果的に壽公房側の公正人員は總二十兩の工食銀をもらうことになる。壽公房が三日前、相公房と共に作った合同があるにもかかわらず、承役人の負擔を輕減するため再び壽公房の内部でこの

ような合同をつくったのは、できる限り負擔を公平に分けようとする總戸の意志の反映である。

こうした總戸の意義について鈴木博之は、「總戸は公權力の側から見れば、納税團體としての役割を持ち、それまでは在地の慣習として存在してきた族産を公的に認可するという意味を持っている。また同族にとつてはそれまで族人に分散されていた族産の所有權を總戸名下に統一し、一つの法人格的な獨立體として機能させることが可能になったといえる」と説明した。これは族産管理機構としての總戸の性格を強調したものである。桃源洪氏一族の總戸の場合もちろん族産管理機構としての意味を持っていたと思われるが、筆者が強調したいのは、桃源洪氏の總戸は解體されてゆく里甲制の下で、再生産の基盤を脅やかされていた里甲戸に、「團體としての求心性」と「内部での負擔の公平性」を保障する役割を演じていた、ということである。これによって、徽州での里甲戸は依然として税役負擔税團體としての機能を維持できた。また、このような現実的な理由があつたので、桃源洪氏一族には宗族の分派を單位として構成された複數の總戸が存在したのであつたし、總戸にもかかわらず、戸名の變化が見えると思われる。本稿は一つの事例研究に過ぎないが、徽州が同族結合が強かつた地域であり、同族村落が多い地域であつたことを考慮するなら、この事例は、徽州で里甲制が長く清代中後期までも機能しえた背景を説明していると思われる。⁽³⁸⁾

しかし一つ注意したいことは、總戸がいつも求心性と公平性を保障できたのではなかつた、ということである。宗族の内部でも紛争が発生する可能性は常に存在していた。例えば、承役人が死亡したことで、その人が擔當すべき分をめぐつて宗族の内で訴訟が起つた場合⁽³⁹⁾があり、また承役人がすでに決められた津貼銀に對して不満を提起して、より多い津貼銀をもらった場合もあつた。⁽⁴⁰⁾これらの例は結果的に圓滿解決されて合同という形式の文書が作られたが、紛争が内部で解決できなかった場合は、このような總戸の役割を期待することができない。しかし、宗族を單位とした總戸は他の何より社會的・制度的變化に柔軟かつ迅速に對應することができたと思われる。⁽⁴¹⁾

第二節 宗族と國家

總戸が擔税團體であり、里甲戸として機能していたとすれば、これを通じて宗族と國家がどのように接していたのかを示すことができる。そこで、總戸の内部で徭役の分擔のために議論する過程を見ることが出来る。

周知の通り、清朝入關後のしばらくの間は、清朝の支配體制はまだ堅固ではなかった。賦役徵收においても依然として荒田・隱田・錢糧の滯納などが解決しなければならぬ問題として残されていた。従って清朝は正確な土地臺帳の把握のために康熙二（一六六三）年、全國的な土地丈量を實施した。⁽⁴²⁾（C）と（D）の文書に見える祁門縣、五都（二圖）の清丈も、他ならぬ康熙二年の全國的な土地丈量の一環であつたと思われる。

しかし、丈量は國家の意志の通り順調には進まなかつた。丈量策に對する意見の相違が朝廷の内にあつたのみならず、⁽⁴³⁾ 地方では特に郷紳層の強い抵抗に直面した。⁽⁴⁴⁾ 祁門縣、五都の清丈も順調に進まなかつた。合同に見えるように、まず洪元慶と洪光暉を公正と公副の役に、その他の弓手・算手・書手・畫手の役にも人員を投入し、⁽⁴⁵⁾ 十名の里長が合同を作つて丈量を實施しようとした。しかし再び桃源洪氏の兩大房に公正の役のための人員を選んで朋充するように指示が下されねばならなかつたのは、詳細は不明であるが、進行の難しさと關係があるはずである。そして丈量の重要性を勘案すると、桃源洪氏の兩大房に丈量の責任を負わせたのは、この宗族組織が鄉村社會で占めている地位や役割と關係があると思われる。では、公正の役を分擔するための議論の過程を整理してみよう。

①桃源洪氏の兩大房（相公房・壽公房）は、公正の役を朋充せよと國家から指示を受けた。

②兩大房は公正の役を共同に分擔することにし、工食銀二十四兩と公費銀、每石當り五錢ずつを取り立てて承役人に支給することを決めた。（十一月二十三日）

③三日後、壽公房では二十四兩の工食銀の中で壽公房の公正人員がもらう分である十二兩に、壽公房が準備した六兩を

加えて總十八兩を彼ら公正人員に支給することを決めた。(十一月二十六日)

④以後、壽公房では再び工食銀十八兩に二兩を加えて全部で二十兩を支給することを決めた。

(D)の合同の再批に、「寫冊雜務は相公房の例に従う」と言っていることによれば、このような議論過程は相公房でも同じくあったと思われる。

ここでは丈量に關する國家の意志が下に傳わる過程が分かる。それは「國家(地方官)↓兩大房↓壽公房あるいは相公房」である。相公房や壽公房が里長戸であるから、これは當然だと考えられるかも知れないが、宗族組織を單位として構成された總戸の内部の議論過程では、國家と里甲戸の接觸が、實質的には國家と宗族の接觸であつたことが分かる。國家あるいは地方官により總戸が容認ないし默認されたということだけでも、賦役徵收のため個別戸を直接把握しようとする國家の意志があまり積極的ではなかつたことが分かるが、これは結果的に國家と宗族を直接に接觸させる役割を演じた。即ち、國家が總戸＝宗族組織で把握できたかどうかはよく分からないが、子戸の立場から見れば、里甲戸として國家と接したことではなく、宗族組織の構成員として國家と接したということの意味する。

一方、明中期以降の鄉村社會には里甲組織以外にも色々な鄉村組織が並存していた。里甲體制の枠で維持されてきた社會秩序が動搖し始めた狀況で、各地には郷約・保甲など鄉村教化や治安維持のための組織が分散的に作られた。明末になると、このような鄉村組織は地方官により政策的に奨勵されることになって、様々な鄉村組織が色々な社會問題に影響を及ぼすことになる。(E)と(F)の合同は、都長と、團練の郷總および練副の選出をめぐる郷約の公議である。こうした合同は、宗族が里甲のほかの鄉村組織とどのような關係を結んでいたのかを示す得たい史料である。これを利用して宗族と國家が接する方式に對する説明を補充したい。

(E)の合同で注目されるのは「四約」と呼ばれる組織である。里甲制下にあつては鄉村社會の問題は、十名の里長が議論して決定するのが普通であつた。⁽⁴⁶⁾ 祁門縣、五都(一圖)の場合も「二甲里長」が現年里長として登場しているが、彼

は「不便擅報」を理由として、都長を選んで報告せよという縣の指示を里長たちの會議ではなく、「四約」を通して議論している。とすれば、「四約」という組織が里長たちの公議以上に都（圖）全體の意見を代表できていたと考えねばならない。五都で「四約」がどのように構成されていたのかが分かれば、「四約」の組織の性格が把握できるだろう。

（F）の合同は四約の構成をより明瞭に示している。（E）の合同で、すでに四約の一つであると思われる「樺墅約」という名稱が確認できるが、ここではさらに「錦溪約」・「珠溪約」という名稱がみえる。祁門縣、五都が胥嶺・樺墅・仰村・于村という四つの自然村落で構成されていたのを思い出せば、「樺墅約」は桃源洪氏の本據地の樺墅村の郷約であろう。ところが、同治『祁門縣志』卷八、輿地志八、橋梁 五頁aには、錦溪橋という橋梁の名稱が見え、割註に「在仰村、仰姓建」という説明がある。即ち「錦溪約」は仰村の郷約である可能性が高い。また同治『祁門縣志』卷一〇、輿地志一〇、寺觀、五頁bには、五都に珠溪寺という名稱の寺刹がある。正確な所在は不明であるが、珠溪約は珠溪寺がある村落で組織された郷約であろう。位置は恐らく胥嶺と于村との中の一所であろう。四約の中、残り一つの名稱が史料には現れていないが、「四約」とは五都の四つの自然村落を單位に作られた郷約組織である可能性が極めて高い。即ち康熙初期、祁門縣の五都では自然村落を單位とした郷約の連合體である四約の公議を通して、鄉村社會の問題を議論し決定したのである。だからこそ、四約の公議は都（圖）全體の合意としての權威を持つことができたのである。

ところが（E）の合同によれば、四約の公議で樺墅約から都長一名を充當することを決めた後、その問題がすぐ桃源洪氏一族で議論されている。（F）の合同でも、樺墅約から練副一名を充當することを決めた後、同じく宗族の内練副の役と関連した具體的な議論が展開されている。これは樺墅約が、即ち桃源洪氏の宗族組織であることを示唆する⁽⁴⁸⁾。とすれば、五都における四約の公議は宗族の公議と垂直的に結ばれており、樺墅約の場合は郷約の公議⁽⁴⁸⁾ 宗族の公議であることが分かる。即ち、祁門縣、五都の郷約の場合を見て、國家の意志が傳わる過程は、表面的には「國家（地方官）↓里甲」であるが、その内實は「國家（地方官）↓郷約（或は里甲）↓宗族」という構造であった。桃源洪氏一族は里甲のみならず、

郷約を通して結果的に國家と直接に接觸していたことを確認することができる。

結 論

元末明初、樺墅村へ移住した洪均祥を始遷祖とする祁門縣の桃源洪氏一族の事例を通して次のようないくつかのことを確認することができた。

一、桃源洪氏一族は洪均祥の長子と次子との子孫である相公房と壽公房とを中心とした宗族組織を形成し、この宗族の分派を単位として、里甲制上の稅役負擔團體として機能する總戸を構成していた。

二、總戸に賦課された徭役を負擔するための公議にみえる方法によれば、津貼銀は稅糧額という負擔能力に従い、公平性を考慮している。實役の部分も相公房と壽公房とで負擔が均等になされるべきであるとは言われるが、徭役を機械的かつ時間的に等分したのではなく、一年の徭役の輕重、あるいは負擔能力の差を勘案して負擔を公平に分けている。また兩房に屬している構成員の徭役負擔をできるだけ輕減し、共同で負擔する方向が考慮されている。このような分擔方法は、里甲制が維持されるための基本條件であると言われる「團體としての求心性」と「内部での負擔の公平性」を、總戸の公議を通して保障できたということを意味する。

三、宗族と國家の關係という面に注目すると、丈量に關する國家の意志がまず里甲戸である桃源洪氏の兩大房（相公房・壽公房）に傳えられ、兩大房が合意したことに従って、相公房と壽公房が自らの單位内で再び具體的に議論していた。また都長と團練の鄉總・練副の選出のための公議でも、國家の意志がまず里甲に傳えられ、これが自然村落を單位とする四つの郷約により議論されるが、その中で樺墅約は桃源洪氏一族で構成された郷約に他ならなかった。即ち、桃源洪氏一族に見られる以上の事例は、里甲組織や郷約が宗族組織で構成されており、結果的に宗族が國家と直接に接觸していたことを示している。

【附錄 1】『中國歷代契約會編考釋』（張傳璽主編、北京大學出版社、1999）收錄
『洪氏歷代契約抄（壽公祀業抄白簿）』文書一覽

番號*	文書作成日	文 書 名	主要當事者**	備 考
552	洪武20(1387) 3. 1	祁門縣王亥郎等賣田契	王亥郎・王伯成/ 洪均祥	
554	洪武23(1390) 7.20	祁門縣宋宗蔭賣山契	宋宗蔭・宋張保/ 洪寬	
563	建文2(1400) 8.22	祁門縣宋孟義等賣山契	宋孟義・宋和/ 洪某	
574	永樂6(1408) 11. 5	祁門縣鄭永寧賣田契	鄭永寧/洪均祥	
581	永樂14(1416) 5. 9	祁門縣王亥賣房地契	王亥/洪寬	
592	永樂21(1423) 2.14	祁門縣洪伯驥賣田契	洪伯驥(東都)/ 洪寬	
593	永樂21(1423) 2.16	祁門縣李仲得賣山地契	李仲得/洪寬	
596	永樂22(1424) 7.24	祁門縣李茂昭賣山地契	李茂昭/洪寬	
598	洪熙元(1425) 11.26	祁門縣洪伯驥賣田契	洪伯驥(東都)/ 洪寬	
636	弘治6(1493) 9.18	祁門縣方邦本賣山地契	方邦本/洪濬・洪達 方岳/洪濬等	
637	弘治6(1493) 10. 7	祁門縣方岳賣田契	方岳/洪達等	
638	弘治6(1493) 10. 7	祁門縣方邦本賣田契	方邦本/洪達等	
642	弘治17(1504) 閏4.13	祁門縣方相賣田契	方相/洪績等六房	
644	正德2(1507) 4.28	祁門縣饒杲等賣田契	饒杲・饒旭等(饒昂) /洪六大房	
645	正德7(1512) 4.13	祁門縣黃鎰賣田契	黃鎰/洪某	所有稅糧、隨即推割 正德7(1512)年は大造之年
656	嘉靖1(1522) 1.18	祁門縣方恍賣田契	方恍/洪積・喧・瓊 ・千侃・起等	買主で署名された人物は各 各、六大房を代表すること であるとおもわれる。
674	嘉靖36(1557) 2.11	祁門縣黃仁賣田地屋基契	黃仁/洪氏族衆	
675	嘉靖36(1557) 5. 1	祁門縣洪瓚等賣田契	洪瓚・珙・瑚 洪應陽・舜民(五都) /壽二公六房子孫	所有稅糧、隨即撥與六房供 解
682	嘉靖39(1560) 12.20	祁門縣洪應陽兌佃契	洪應陽(五都)/ 壽二公六房子孫禮祀	所有稅糧、隨時過割供解
684	嘉靖40(1561) 3. 9	祁門縣洪世仁兌佃契	洪世仁(五都)/ 壽二公分下子孫	所有稅糧、聽自本戶隨時收 割
688	嘉靖42(1563) 6.15	祁門縣洪應陽賣田契	洪應陽(五都)/ 六房壽公子孫	所有稅糧、隨時割與本戶供 解
690	嘉靖44(1565) 5.11	祁門縣洪福佑賣田骨契	洪福佑(五都)/壽公	

829	萬曆 5 (1577) 3. 1	祁門縣畢伴儻當牛文約	畢伴儻(當人)/ 洪六房(當主)	
830	萬曆14(1586) 12. 4	祁門縣僕人胡喜孫當男約	胡喜孫(僕人)/ 洪壽公祀(房東)	
831	萬曆33(1605) 6. 8	祁門縣洪嘉永典入殿屋合同	洪嘉永/壽公禮祀	
836	弘治 8 (1475) 7. 8	祁門縣康榮得租地批	康榮得/洪某	劉和惠論文、1986の附表、 弘治 8 年文書と同一
838	弘治13(1500) 11.13	祁門縣胡成租田地約	胡成/洪某	劉和惠論文、1986の附表、 弘治13年文書と同一
839	正德15(1520) 11.21	祁門縣汪文等租山地合同	汪文/洪淵(洪積等)	
840	嘉靖 9 (1530) 7.	祁門縣胡三乞等租田帖	胡三乞・尙德/洪某	
841	隆慶 3 (1569) 8.23	祁門縣畢伴儻租山地約	畢伴儻/六大房洪某	劉和惠論文、1986の附表、 隆慶3年文書と同一
842	萬曆10(1582) 7.28	祁門縣山僕胡勝保等租地約	洪壽六房山僕 胡勝 保・胡遲保・胡記・ 胡初等/洪壽公	劉和惠論文、1986の附表、 萬曆10年文書(下)と同一
850	弘治11(1498) 6.21	祁門縣饒永善斷山文約	饒永善/洪達	劉和惠論文、1986の附表、 弘治11年文書と同一
852	正德 2 (1507) 閏 1. 17	祁門縣胡進童兄弟斷山合同	胡進童・三乞/洪積	劉和惠論文、1986の附表、 正德2年文書(4)と同一
856	正德 9 (1514) 12.21	祁門縣胡乞等請墳山應役還 文	胡乞・胡進童/洪家	
857	嘉靖14(1535) 12.13	祁門縣潘九等請墳山應役約	潘九・潘二保/洪家	
858	嘉靖22(1543) 11.	祁門縣朱元等住屋應役契	朱元・同弟侄四房/ 洪起等(六房)	
859	嘉靖38(1559) 9.11	祁門縣汪互等住屋應役文書	汪互・陳球・汪常/ 洪某(房東公衆)	
860	隆慶 5 (1571) 1. 1	祁門縣莊僕胡初等住屋佃田 應役文約	胡初・胡喜孫・胡奇互 (胡奇護)/洪壽二公 秩下子孫洪六大房等	
861	萬曆12(1584) 11.18	祁門縣僕人胡喜孫等請墳山 應役文約	胡喜孫・胡奇護/ 洪(壽公)六大房	
863	萬曆33(1605) 12.17	祁門縣僕人胡勝保等四大房 應役文書	胡勝保・胡住保・胡 遲保・胡奇(四大房) /洪壽公	
864	萬曆34(1606) 2.15	祁門縣僕人朱天元等還典養 文約	朱天元・朱虎生・朱 寄德/洪壽公	
880	嘉靖30(1551)	祁門縣洪氏祖產規約***		
883	隆慶 5 (1571)	祁門縣洪儒等族衆護產誓詞		
886	洪武20(1387) 9. 8	祁門縣王寄保批產契	王寄保(妻叔父)/ 洪均祥(侄婿)	
887	洪武22(1389) 2.	祁門縣王阿許分產標帳	王阿許(岳母)/洪均 祥(女婿)(孫柳相)	
888	永樂20(1422) 9. 22	祁門縣胡仕批山契	胡仕(岳父)/ 洪寬(女婿)	

890	正統2 (1437) 10. 4	祁門縣洪阿王分產合同文書	洪阿王(洪均祥の妻) /次男寬(故)-諧(孫) ・另戶男彥宗・四男景 富・孫 洪深	
891	景泰6 (1455) 9. 26	祁門縣方伯起等分山合同	方伯起・葉仕彰/ 葉茂芳・得芳	
893	成化2 (1466) 8. 29	祁門縣謝友政等劃分山界合 同	謝友政/洪淵	原無硬界、以致互爭
894	成化4 (1468) 5. 12	祁門縣畢仕文劃分山界合同	畢仕文/ 洪淵・瀚(洪家)	二家不願紊繁
895	成化6 (1470) 1. 28	祁門縣洪景富等分山地合同 文書	洪景富・洪深・洪瀚 /洪淵	景福(富)、對實與本都饒榮 保後、侄洪淵狀告到府、不 願紊繁
896	成化10(1474) 6. 21	祁門縣饒雲宗劃分山地界文 約	饒雲宗/洪深・洪淵	
897	成化15(1479) 6. 16	祁門縣饒榮宗等劃分地界合 同	饒榮宗/ 洪(景)富・汪琴	三家地土相連、未曾明界、 今互告拘提
898	成化16(1480) 4. 13	祁門縣汪濂等劃分山界合同 文約	汪濂/洪諧	
903	嘉靖36(1557) 12. 11	祁門縣洪昂等三房管理墳地 合同	洪昂・洪儒・洪珏三 大房間合同	勸諭里長 陳廷震
904	隆慶6 (1572) 1. 6	祁門縣饒有壽賠償文書	饒有壽/洪某	約正 洪壹

* 【中國歷代契約會編考釋】の文書番號に依る。

** 賣買文書の場合、(賣主)/(買主)を表示。その他の文書は()で表記。

*** 【中國歷代契約會編考釋】にはこの文書の註(2)で桃源を祁門縣十九都の村名であると言っているが、祁門縣五都の樺墅里の桃源洪氏を指し示すことであると思われる。

【附錄 2】『徽州千年契約文書』（花山文藝出版社）收錄、桃源洪氏關係文書一覽

番 號	文書作成日	文書名	主要當事者*	出典**	備 考
1	正德11(1516) 1.25	洪積等六分子孫均業 合同***	洪積・洪暄・洪遠・ 洪千・洪侃・洪起 (五都)	1 卷、p.351	其糧隨時分撥供解
2	隆慶 1 (1567) 3. 8	洪產賣田白契	洪產(五都)/洪某	2 卷、p.395	津貼糧長 所有稅糧、隨即推與買人 供解
3	隆慶 1 (1567) 3.15	洪天錫賣田白契	洪天錫(五都)/ 壽二公	2 卷、p.396	所有稅糧、聽自壽二公隨 時收割供解
4	隆慶 2 (1568) 3.11	洪天錫賣田白契	洪天錫(五都)/ 陸房壽公	2 卷、p.411	所有稅糧、隨即推與供解 母詞
5	隆慶 2 (1568) 3.22	洪阿仰賣山白契	洪阿仰(五都)/六 房	2 卷、p.414	
6	隆慶 2 (1568) 4. 2	洪音賣田白契	洪音(五都)/ 壽公六方子孫	2 卷、p.415	
7	隆慶 4 (1570) 6. 2	洪季芳賣荒竹山白契	洪季芳(五都)/六 房	2 卷、p.457	
8	隆慶 4 (1570) 12.24	洪時孫賣房地白契	洪時孫(五都)/ 六房壽二公子孫	2 卷、p.464	
9	萬曆10(1582) 11. 9	祁門洪公壽買產契尾	汪奎彥・汪邦化・ 洪應陽/洪公壽	3 卷、p.117	
10	天啓 2 (1622) 7.13	洪學富賣田白契	洪學富/壽公匣	4 卷、p.57	所有稅糧在 德本戶 、照則 扒與供解無詞、天啓 2 (1622)年是大造之年
11	天啓 2 (1622) 7.16	洪公孫賣田白契	洪公孫/壽公	4 卷、p.58	所有稅糧在 德本戶 、隨即 扒與供解母詞、天啓 2 (1622)年是大造之年
12	天啓 3 (1623) 11. 5	洪應登賣田白契	洪應登/族叔某	4 卷、p.120	所有稅糧隨即在 德本戶 、 扒與供解無詞
13	天啓 4 (1624) 7. 5	洪有功賣田塘白契	洪有功/壽公	4 卷、p.141	所有稅糧、照丈則、隨即 在三甲洪元慶戶、扒與供 解〔供〕無詞
14	天啓 4 (1624) 8. 6	祁門洪公壽買產契尾	謝存誠/洪公壽	4 卷、p.143	
15	天啓 4 (1624) 10.29	□大年賣水田白契	大年/洪公壽	4 卷、p.148	所有稅糧照則在 元慶戶 、 隨即扒與供解母詞
16	天啓 4 (1624) 12.28	洪尚壩賣地白契	洪尚壩/公壽	4 卷、p.154	所有稅糧照則隨即在 元慶 戶、扒與公壽供解母詞
17	天啓 5 (1625) 4.15	洪大充賣地白契	洪大充/壽公	4 卷、p.165	其糧在三甲洪元慶戶、隨 日過與買主供解
18	天啓 7 (1627) 9. 2	洪僉富賣田白契	洪僉富・侄春生/ 壽公祀匣	4 卷、p.229	編糧自三甲起至六甲止、 無措辦納所有稅糧在 元慶 戶、隨即扒與供解無詞
19	天啓 7 (1627) 11.15	洪天南等捐田修祠契	洪天南(授)/ 均祥公祀匣(受)	4 卷、p.234	其糧在 元慶戶 、隨即聽憑 收割供解母詞
20	天啓 7 (1627) 11.15	洪文佑等捐田基地修 祠契	洪文佑等(授)/ 均祥公衆祠(受)	4 卷、p.235	所有稅糧、照丈則、推入 衆祠匣解納母詞

21	崇禎1(1628) 8.10	洪尙壩賣地推單	洪尙壩/壽公	4卷、p.253	今隨即在三甲洪元慶戶、 扒與買人供解
22	崇禎1(1628) 11.20	洪學富賣田白契	洪學富・弟來富/ 壽公祀匣	4卷、p.259	(從弟)僉富因三甲戶役排 年支費、已將伊分…賣與 壽公爲業訖。…(本身)… 今因排年支費、…立契出 賣與壽公祀匣。 所有稅糧在元慶戶、照則 隨即推割供解母詞
23	崇禎2(1629) 9.4	洪大鰲賣地白契	洪大鰲・弟大升/ 壽公	4卷、p.280	所有稅糧在三甲洪元慶戶、 隨即扒與供解
24	崇禎2(1629) 10.20	洪僉富等賣水田白契	洪僉富・侄春生/ 壽公	4卷、p.283	今因田公分下七甲糧八甲 編無措所有稅糧在三甲洪 元慶戶、隨即扒與供解
25	崇禎2(1629) 11.19	洪僉富等賣田推單	洪僉富/壽公	4卷、p.285	今奉新例、隨即三甲洪元 慶戶推扒、聽當年頭首自 八甲糧起前去解納。自賣 年起、至八甲編止該得代 納、盡行收足、並無言說。
26	崇禎3(1630) 2.12	洪大鰲賣基地白契	洪大鰲/壽公祀匣	4卷、p.289	所有稅糧在三甲洪元慶戶、 隨即照則扒與供解母詞
27	崇禎4(1631) 1.19	洪貞涵賣地白契	洪貞涵/均祥公	4卷、p.300	
28	崇禎5(1632) 2.27	洪大壯賣地白契	洪大壯/壽公祀匣	4卷、p.319	所有稅糧在元慶戶、隨即 扒與供解
29	崇禎9(1636) 7.28	洪阿謝等賣店基白契	洪阿謝・洪僉富/ 壽公祀匣	4卷、p.409	所有稅糧在元慶戶、扒與 供解無詞
30	崇禎13(1640) 7.24	應昌賣店基地白契	應昌/壽公祀匣	4卷、p.459	所有稅糧在積(元)慶戶、 扒與供解母詞
31	崇禎13(1640) 12.24	洪玉生等典屋契	洪玉生・道生・遵 生(典人)/壽公六 大房(典主)	4卷、p.461	
32	崇禎14(1641)	祁門洪公壽戶 《清冊供單》		10卷、p.291	
33	康熙9(1670) 7.16	洪光復賣菜園地赤契	洪光復/ 族兄伯正(順石)	1卷、p.66	所有稅糧即在一甲洪日振 戶、推與三甲洪元慶戶供 解無詞
34	康熙25(1686) 4.16	祁門胡大毛等 立承約典養文書		1卷、p.97	

* 賣買文書の場合、(賣主)/(買主)を表示。その他の文書は()で表記。

** 33番を除いたすべての文書の出典は『徽州千年契約文書』の宋・元・明編である。33番は清・民國編である。

*** 『徽州千年契約文書』に収録された文書名は「洪積等賣基地白契」であるが、内容を見ると、「洪積等六分子孫均業合同」の方が正しいと思われる。

註

(1) 多賀秋五郎『中國宗譜の研究(資料編)』、日本學術振興會、一九八二、所收の「宗族の族人統制に關する資料——家規・宗約等——」(六七六—七八三頁)には、計一八種の家法等が收録されているが、そのなかでこのような賦役に關する規定は三六種の家法に見られる。

(2) 片上剛「清末廣東省珠江デルタの圖甲表とそれをめぐる諸問題——稅種・戶籍・同族」、『史學雜誌』九一—四、一九八二・同氏「清末廣東珠江デルタの圖甲制について」、『東洋學報』六三—三・四、一九八三・同氏「清末廣東省珠江デルタにおける圖甲制の諸矛盾とその改革(南海縣)」、『海南史學』二一、一九八四・同氏「清末廣東珠江デルタの圖甲表と同族支配の再編(順德縣・香山縣)」、『近代中國史研究』四、一九八四・劉志偉「明清珠江三角洲地區里甲制中“戶”的演變」、『中山大學學報』、一九八八—三・同氏「清代廣東地區圖甲制中的“總戶”與“子戶”」、『中國社會經濟史研究』(廈門大學)、一九九一—二・同氏「國家與社會之間——明清廣東里甲賦役制度研究」、『中山大學出版社』、一九九七・鄭振滿「明清福建里甲戶籍與家族組織」、『中國社會經濟史研究』、一九八九—二・同氏「明清福建家族組織與社會變遷」、『湖南教育出版社』、一九九二・陳支平「清代賦役制度演變新探」、『廈門大學出版社』、一九八八・元廷植「清初 戰亂期 福建の 稅役徵收と 宗族」、『農壇學報』八七、一九九九・同氏「清 中期 福建の 徵稅と 宗族」、『江原史學』一五、二〇〇〇等は、廣東と

福建地域で里甲制が清代あるいは民國時期までも存続していたこと、賦役徵收と宗族組織との關係などについて論じている。徽州の里甲制に關しては周紹泉「徽州文書所見明清初の糧長・里長和老人」、『中國史研究』、一九九八一・權仁溶「明末 徽州の 土地丈量と 里甲制」、『東洋史學研究』六三、一九九八・同氏「明清初 徽州の 丈量單位と 圖正」、『東洋史學研究』六五、一九九九・同氏「明代 徽州の 里編制と 增減」、『明清史研究』二三、二〇〇〇・同氏「明清初 徽州の 役法變化と 里甲制」、『歷史學報』一六九、二〇〇一等がある。

(3) 劉和恵「明代徽州祁門洪氏譽契簿研究」、『中國社會經濟史研究』、一九八六—二。

(4) この文書については【附錄1】を参照。

(5) この文書については【附錄2】を参照。また【附錄1】と【附錄2】の文書は時期的にほとんど重複なく連續している。

(6) これは筆者による假稱である。この文書群の收集と所藏に關する説明は中島樂章「明末徽州の里甲制關係文書」、『東洋學報』第八〇卷第二號、一九九八、一二四—一二五頁を参照。ここで中島樂章は本稿のテーマと關連してこの文書群の重要性について言及している。

(7) 文書名は筆者が内容に従って付けたものである。文書名の次に表示した番號は、南京大學歷史系資料室の目録上の資料番號である。毀損と磨耗などの原因で判讀することが

難しい文字は、□で表示し、ここに當たると思われる文字や通字の場合は（ ）で表記した。明白な誤字や缺字は「」で正字を表記した。以下の文書でも同様である。

- (8) 同治『祁門縣志』卷二〇、職官表をみると、李希泌は萬曆三十六（一六〇八）年に祁門知縣として赴任した。道光『祁門縣志』の記録も同じである。しかし康熙『徽州府志』卷四、秋官志中、縣職官、祁門縣をみると、李希泌は萬曆三十一（一六〇三）年に赴任したと記録されている。文書の記録と共に考えれば、道光・同治『祁門縣志』の記録は間違っている。

- (9) 祁門縣の糧長と區に關して、同治『祁門縣志』卷十三、食貨志、賦役、一〇頁bには「糧長先年分爲四區、每區一正一副、充者苦累、後多朋貼」という記録がある。區については、鄉村行政單位としての意味を強調した小山正明「明代の糧長」、『明清社會經濟史研究』、東京大學出版會、一九九二を參照。

- (10) 『明會典』卷二九、「徵收」には「該設糧長去處、委官一員、率領該設糧長正身、務要〔名額〕齊足、定限七月二十日以前赴京面聽宣諭、開領勘合、回還〔催〕辦〔秋〕糧」また「凡糧長關領勘合、回還催辦秋糧、務要依期送納畢日、赴各該倉・庫、將納過數目于勘合內填寫、用印鈐蓋其糧長將填完勘合、具本親齎進繳〔戶科〕。仍赴部〔戶部〕明白銷注。如是查出糧有拖缺、勘合不完、明白究問追理」という規定がある。文書にみえる項目は税糧を運送する過程で必要な手續きであると思われる。特に勘合については

嘉靖『徽州府志』卷八、食貨志、歲供の「糧長勘合」の項目に、「嘉靖年間、〔南京工部領辦糧長勘合、紙一千四十六張、底簿中夾紙一百九十張。……〕銀二十一兩三錢」と記されている。（一）は割註）

- (11) 圖（里）が表記されていないのは、五都には圖（里）が一つしかないからである。すなわち、五都一圖三甲を指す。（12）五都一圖に屬している桃源洪氏以外の甲首戸を指すのではないかと思われる。清文は圖全體が對象になるので、他姓の甲首戸も津貼銀を收めたと思われる。

- (13) 『清實錄』などの官纂史料による限り、順治十年以前には丈量の必要性についてはかなり議論されたが、實際に丈量が實施された例はなかったという。そして順治四年五月に江西巡按、吳贊元が丈量を建議したことはあるが、やはり實際には實施されなかったという（西村元照「清初の土地丈量について——土地臺帳と隱田をめぐる國家と郷紳の對抗關係を基軸として——」、『東洋史研究』三三・三、一九七四、一〇三—一〇七頁）。ただし、順治二年に全國的な賦役全書の編纂を命じたことがあり、これに關連して『清實錄』、順治三年四月壬寅條には賦役全書を編纂する動機として、「……現在する田土と民間で實際に耕作している田土はどれくらいか……」などの把握を擧げている（高嶋航「清代の賦役全書」、『東方學報』（京都）七二、二〇〇〇、四五四頁）。本文書でみえる順治四年の丈量がこれと關係があるのではないかと思われる。また、本文書によるかぎり、從來の通説とことなつて、徽州では何らか

の清丈が行われた可能性が極めて高い。

- (14) 洪孔政(三十一世)・洪壽基(三十一世)・洪哲先(三十一世)が相公房に属した人物であったのを、『桃源洪氏宗譜』で確認できた。しかし壽公房の人物であると推定される残り三名については、洪懋相(三十二世)だけを確認できた。

- (15) 註(14)で言及したように、壽公房分の公正人員は洪懋相を除外すると族譜上では確認できなかった。ただ、洪懋相の字が公履ということが確認できたので、(D)の合同の公正人員と(C)の合同の壽公房分の公正人員は同一人物であると思われる。

- (16) これは組織としての郷約ではなく、郷約組織の長(普通、約正・約副と呼ばれる)を意味する。

- (17) これが具體的に何を指すのか良く分からないが、光緒二十六年(一九〇〇)年まで残っていたと言われる惇睦祠・丕承堂・慎微堂を指稱する可能性が高い。【圖】桃源洪氏の宗族組織を参照。

- (18) 註(12)で言及したように、他姓の甲首戸を指稱すると思われる。

- (19) 合同の最後の部分に「除田畝外、以本作糧」と言っていることを参考にすると、田畝の外の資産を糧で換算して津貼銀を負課したことであると思われる。

- (20) 『祁門縣志』(同治十二年刊)卷三、輿地志三、疆域、四頁a。

- (21) 普通は樺墅里と呼ばれるが、里甲制の里との區別のため、

村で表記する。

- (22) 上海圖書館所藏、清・洪釗纂修、光緒二十六年惇睦堂木活字本である。

- (23) 因舊居洪家墩、兵燹蕩然、邨基隘小、遂徙家王村。以其地舊名桃木源、仍之爲桃源派、村口復多古樺、故又名樺墅里。

- (24) 【附錄1】の八八七の文書には「招聘到同都洪均祥到家、成増合活」という表現がある。劉和惠前掲論文、一九八六一三、三一頁を参照。なお安徽省博物館所藏の『洪氏譽契簿』は直接の閲覽の機会がなかったので、詳細は不明である。劉和惠の上掲論文の「附表・洪姓地主土地租佃契約內容摘要」に摘示された文書によれば、【附錄1】に收録した北京圖書館藏の『洪氏歷代契約抄』(一名、『壽公祀業抄白簿』)にはない文書も多数含まれている。

- (25) 洪均祥の家系については、劉和惠が上掲論文の冒頭で、安徽省博物館所藏の『洪氏譽契簿』の文書に基づいて簡単に説明している。しかし文書史料だけを根據としたために、まま誤謬もみられ、『桃源洪氏宗譜』と對照して、説明を補充する必要がある。

- (26) 【附錄1】の八九〇の文書には景宗の名前を彦宗と記す。彦宗と名が變わったのは、王姓への出繼のためだと思う。この文書では彦宗に關して「另戸男」と明記している。

- (27) 族譜上の名は「積」である。他の人物である可能性についても検討してみたが、族譜上には同時代の人物のなかで「績」という名前は出てこなかった。恐らくこの二つの文

字を並用したか、脱草の誤謬ではないかと思われる。

- (28) 【附録1】九〇三の文書には「洪岳・洪儒・洪珏三大房」と記されている。族譜によれば、洪岳は洪均祥の長子である洪景榮の曾孫、洪儒は洪景寬の曾孫、洪珏は洪景富の曾孫であった。即ち、三大房は始祖である洪均祥を頂點とする桃源洪氏全體を意味し、各房は洪均祥の四人の息子の中で王姓へ出繼した景宗を除いた三人の息子を頂點とする宗族組織である。

- (29) 廣東の總戸については前掲の片山剛と劉志偉の一連の論文を参照。

- (30) 徽州の總戸については鈴木博之「明代徽州府の族産と戸名」、『東洋學報』七一一・二、一九八九を参照。特に徽州の總戸の實態に對しては樂成顯（岸本美緒譯）「明末清初庶民地主の一考察——朱學源戸を中心に——」、『東洋學報』七八一、一九九六（樂成顯『明代黃冊研究』、中國社會科學出版社、一九九八の第一章に再收）を参照。鈴木博之がいう帶管戸としての地位に關しては註32を參考。
- (31) (C)と(D)の文書にも「洪元慶」という戸名が使われている。清の康熙初期まで「洪元慶」という戸名が使われていることが分かる。

- (32) 鈴木博之の研究によれば、總戸は里甲編制上で帶管戸の地位であり、從つて雜役は負擔したが、里甲正役は負擔しなかったという（鈴木博之「前掲論文」、一九八九、一一—一二頁）。使用した史料に時間的な差はあるが、この合同で總戸である壽公六大房は里長役を擔當している。また樂成

顯が分析した朱學源戸の場合も里長戸の地位を持っている。したがつて徽州も總戸は一般的に里長戸の地位を持っていたと言える。

- (33) 【徽州千年契約文書】、宋元明編、卷一〇の「崇禎十四（一六四一）年洪公壽戸手狀底（清冊供單）」には「洪公壽戸」という戸がみえる。恐らく壽公房の總戸名ではないかと思われる。ただ、「崇禎十（一六三七）年洪公壽戸手狀底（清冊供單）」の内容をみると、人丁が「男婦肆口」に過ぎない。この清冊供單は崇禎十五（一六四二）年、明代の最後の大造之年に作られたものであり、「洪公壽戸」という總戸名を使っているが、内容は全く現實を反映していない。

- (34) 徽州府における丈量を行なう公正などの徭役は、里甲制下の里長戸が擔當することが普通であった。だから、洪元慶や洪光暉、その他の丈量人員も里長戸である可能性が高い（權仁浴「前掲論文」、一九九八を参照）。

- (35) 岩井茂樹「公課負擔團體としての里甲と村」、『明清時代史の基本問題』、汲古書院、一九九七。

- (36) 岩井茂樹の「求心性」と「公平性」とは、もちろん國家からの所期の機能を実現するために維持されなければならない里甲組織の状態を説明するものである。しかし、里甲制が動搖する状況でも、里甲制がひとつの國家制度として存在する限り、これに對する鄉村民の對應が朋充あるいは津貼のような制度內的な對應にとどめるのは當然である。ここにおける總戸も鄉村民の制度內的對應だといえる。こ

のような状況を地方官が容認ないし黙認しなければならなかったことは、地方官の立場からも制度外的對應には限界があったことをいう。

(37) 鈴木博之前掲論文、一九八九、一九頁。

(38) 中島樂章は詳細な分析は缺けているが、徽州の里甲制を検討する際に、宗族が里甲制の維持の基盤になったことを推論的に言及している。中島樂章前掲論文、一九九八、一九九頁。

(39) 「乾隆五十七（一七九二）年、項漢良等議立承當催頭合同」（○○○○五六）には「因兆鎰于乾隆五十四年病故、今輪值該股催頭、無人接辦、以致討訟」という記述がある。十年一輪の催頭の役を擔當する方法を決めた乾隆四十六年の合同によって、乾隆五十七年分の催頭の役を三人が共同に負擔することにしたが、その中の一人である兆鎰が既に三年前に死亡したので、兆鎰が擔當すべき分をめぐって紛争が発生したことが分かる。

(40) 「乾隆十五（一七五〇）年、康興仁秩下啓登等議立充當圖總合同」（○○○○五七）に、「再批…因津貼之費不足、後又公議興仁堂内外又津貼谷（穀）四秤・紋銀陸錢、公議之後、充當之人再無得爭競資費多寡。照。」という記述がある。津貼銀の追加支給が宗族の内の自發的な決議ではなく、承役人の要求によることが分かる。

(41) 「康熙四十五（一七〇六）年、康興仁議立承當里役合同」（○○○○五七）には、「再批…所有四十五年□蓬經管、日後里長覆、原照依丙戌（一七〇六）年、亦是之誥・世

滿・世護・世態・世宇充當、不得混扯他人、貼費違前文約津貼無詞。照。……再批…里役如不覆、原照依前文輪流、挨圖充當無詞。照。」という記述がある。この合同は「纔

革里長不用」という官府の指示により「催贖錢糧」の任務を行なう「甲催」の役を充當するために作られたのである。ところが、ここには再び里長の役が復活する場合と、そのまま甲催の役が續けられる場合について各々の對應方法を共に提示している。賦役徵收制度の變化が頻發する状況で、宗族の對應がかなり柔軟で迅速であったことがわかる。

(42) 康熙二年、實施された土地丈量については西村元照前掲論文、一九七二、一〇七―一七頁を参照。

(43) 高嶋航前掲論文、二〇〇〇、四八二―四八四頁。

(44) 西村元照前掲論文、一九七四、一二二―一二七頁。

(45) 註(34)を参照。

(46) 中島樂章前掲論文、一九九八、一三八頁を参照。また康熙二（一六六三）年に作られた（C）と（D）の合同にも清文に關して十排年が議論して合同を作ったことがある。

(47) 五都の寺觀のなかで一番前に紹介しており、「邑人方岳重修珠溪寺紀略」という文章も轉載されていて、大體の來歴が知ることができる。これによれば、珠溪寺は唐の光化二（八九九）年に創建され、明の萬曆年間まで數回、重修されたそうである。五都の最も代表的な寺刹であると思われる。

(48) 拙稿「明中期徽州の郷約と宗族の關係」、「大東文化研究」三四、一九九九で郷約と宗族組織が一致する

事例を分析した。

〔附記〕

本稿は、日韓文化交流基金の支援によるものである。

PUBLIC DISCUSSIONS ON THE DIVISION OF CORVEE LABOR
AND THE CLAN IN HUIZHOU IN THE LATE-MING AND
EARLY-QING PERIODS: FOCUSING ON THE TAOYUAN
HONG OF WUDU IN THE QIMEN DISTRICT

HONG Xingjiu

During the course of the evolution of kinship systems in China, the period of the late-Ming and early-Qing dynasties witnessed the appearance of the most highly developed kinship organization ever seen in China. In the southern region centered on Jiangnan 江南, genealogical tables, which were symbols of consanguineous unions, were frequently compiled during this period. Recorded within these compilations were rules for household etiquette, called *jiafa* 家法, *zonggui* 宗規, etc. These rules often emphasized that "the national tax should be faithfully paid." It is thought that these rules essentially reflected the kinship organization's rising authority and the role of the kinship organization within the national tax system during this period.

In this study, accounts of the decisions of the village council of Taoyuan Hong 桃源洪 of Huizhou-fu 徽州府 Qimen-xian 祁門縣 were analyzed in order to explain the relationship between the compulsory tax system and the kinship organization. The transcript, as a record of the results of the villagers' decisions on how the various forms of corvee labor, *yaoyi* 徭役, which were levied by the state, were to be borne by the citizens, is a rare find in that it is pertinent in examining the kinship organization's role under the *lijiazhi* 里甲制, system of community taxation. The following points have been confirmed as result of the examination of the village records of the clan.

First, members of the Taoyuan Hong clan were the descendants of Hongjunxiang 洪均祥, who had moved to Huizhou-fu, Qimen-xian, Zeshucun 擇墅村 during the period from the close of the Yuan to beginning of the Ming dynasties. The descendants of the first and second sons of Hongjunxiang formed separate branches of the kinship organization, which were known as the Xianggong-fang 相公房 and Shougong-fang 壽公房 respectively. A functioning *zonghu* 總戶, general household, was formed from these branches and was a tax-paying unit within the *lijia* system.

Secondly, as a result of the examination of the records of the Taoyuan Hong

regarding payments in lieu of *yaoyi*, a just burden was determined according to the individual citizen's capacity, as was the case in the payment of the *jintieyin* 津貼銀. In addition, concerning the actual labor, *shiyi* 實役, the burden was not determined mechanically, but the amount of the burden was allotted only after the weight of the year's total tax was taken into account. Also, the tax of members of a branch was reduced whenever possible, and priority was given to payment of the tax by joint-shouldering of the *yaoyi*. This sort of payment technique signifies that the basic conditions, the group's centripetal tendency and the fairness of the payments decided within the group were guaranteed internally by the *zonghu*'s unbiased views and fair treatment. As a final point, in respect to the aspect of the relationship between the kinship organization and the nation, the nation's intent to enforce the *zhangliang* 丈量, the measurement of taxable land, was first conveyed to the two branches of the Taoyuan-hong clan, i.e., the Xianggong-fang and Shougong-fang. These two branches then launched into concrete talks within their respective groups about how to shoulder the tax among themselves in accordance with the agreement of the two branches. Moreover, it can be seen from the transcripts of the election of the *duzhang* 都長 and the leader of the *tuanlian* 團練, i.e., the *xiangzong* 鄉總 and the *lianfu* 練副, the intent of the state was first notified to the *lijia*, and it was debated by the four *xiangyue* 鄉約, communities organized by compact, which were based on four natural villages, that formed a single unit, the administrative entity called Wudu 五都. However, at the same time, the *xiangyue* at Zeshucun, the 擇墅約, was a *xiangyue* constituted of the Taoyuan Hong. As a result, it has become clear that the clan and the state were directly linked because the *lijia* organization and the *xiangyue* were formed from the kinship organization.

THE SIGNIFICANCE OF THE WORD YOU IN A LOCAL SOCIETY OF THE SOUTHERN SONG

OKA Motoshi

How the word *you* 友 was employed is analyzed in this article in order to clarify personal bonds in the local society of the Southern Song dynasty.

In this article, I have scoured the writings of Wang Shipeng 王十朋, Xue Jixuan 薛季宣, Chen Fuliang 陳傅良, and Ye Shi 葉適, four individuals who lived in Wenzhou 溫州 during the Southern Song, determined whom was called *you*, and